



平成23年度 J A 共済総研セミナー
パネルディスカッション 講演録

「地域社会の再生に向けて」



パネリスト

民俗研究家

ゆう き とみ お
結 城 登美雄

J A 長野厚生連佐久総合病院
地域医療部地域ケア科 医長

いろ ひら てつ ろう
色 平 哲 郎

主催者コメンテーター

(社) 農協共済総合研究所
理事長

いま お かず み
今 尾 和 實

コーディネーター

(社) 農協共済総合研究所
調査研究部 主席研究員

かわ い まこと
川 井 真

目次

- 1 はじめに
- 2 地域社会の再生と農協（協同組合）の役割
- 3 産業論だけでは成り立たない農業と医療
- 4 地域で医者を使いこなして欲しい
- 5 初めから医師になる志を持って、医師を目指す若者は少ないのか
- 6 地域とは何か
- 7 会場からの質問
- 8 食料省という発想は、医療ではケア省
- 9 母ちゃんJAをつくろう

（本稿は、本年3月9日（金）に開催された「J A 共済総研セミナー」パネルディスカッションに基づきます。
また、本セミナーは2012国際協同組合同年全国実行委員会の後援事業です。）

1 はじめに

○川井 本日は平成23年度 J A 共済総研セミナーにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。では、ここからはパネルディ

スカッションに移らせていただきたいと思います。パネリストには、先ほど基調講演¹（講演要旨は参考資料1）をいただきました結城登美雄先生、そして色平哲郎先生にご登壇いただきます。また主催者コメンテーターとし

1 『共済総研レポート』No.120（2012年4月）には、講演要旨を含む要約を掲載しています。当内容は、当研究所のウェブサイト（<http://www.nkri.or.jp/>）上でも閲覧可能です。

(参考資料1)

J A 共済総研セミナー 基調講演 講演要旨

①住民を主体にした地域づくり～復興・再生への道～

民俗研究家 結城 登美雄

講演主旨

東日本大震災は、人間が生きていく上で最も大切な食料とエネルギーが、脆く危ういことを突きつけた。私たちはその前提に立ち、今後の日本を考えていかなければならない。

戦後、経済のモノサシでのみ社会を築いてきた私たちにとって、住民主体の地域づくりを進めてきた沖縄・東北のお年寄りたちの生き方は、地域社会の再生を考える上で一助となる。そこからわかることは、「よい地域を生み出すのは、そこに暮らす人々の心と行動にほかならない」ということだ。東北のお年寄りたちの声から考察した「よい地域の7つの条件」も、再生のヒントとなるだろう。

最近では、CSA (Community Supported Agriculture : 地域支援型農業) という生産者のリスクの一部を消費者が負担するシステムの動きもある。こうした仕組みをベースに、農家と消費者をつなぐ役割というものが、今後の農協に問われているのではないだろうか。

②金持ちより心持ち～信州の地域医療の現場から～

J A 長野厚生連佐久総合病院
地域医療部地域ケア科医長 色平 哲郎

講演主旨

佐久総合病院の2代目院長、故・若月俊一は、農民たちの多くが無保険者であったことに心を痛め、あえて「農民に使われる」立場に身を置き、自作の寸劇を通して協同の精神を伝えることにつとめた。こうした医師集団がいなければ、日本の農山村の医療は成り立たず、厚生連病院が全国展開されていなければ、国民皆保険制度の実現もなかったであろう。

しかるに、TPP (環太平洋連携協定) は世界から「日本の宝」と言われる国民皆保険制度を揺るがす可能性がある。薬価が上がり、医療従事者が減れば、医師にかかれぬ人々が生じる。そうなれば、戦前のような不安定な社会になりかねない。

医療技術は医師の権威のため、病院経営のためにあるのではない。地域の人々のためにある。J A の先達が苦勞して育成し、今も農山村に生き続けている相互扶助の精神を守り育てる取り組みが必要である。

(出典) 『共済総研レポート』 No.120 (2012年4月)



パネルディスカッションの様子

て、当研究所理事長の今尾和實もここから参加させていただきます。そして、僭越ですが、本パネルディスカッションの進行を務めさせていただきます、川井真と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、今回のJA共済総研セミナーですが、「地域社会の再生に向けて」というメインタイトルを掲げて開催させていただきました。そこでパネルディスカッションにつきましても、このタイトルに沿って進めさせていただきたいと思います。はじめに、なぜ地域社会の再生が求められているのか、また、その展望についてもご意見をいただき、そして、その先にある日本の未来ということになるのでしょうか、少しずつイメージを膨らませてまいりたいと思います。短い時間ではありますが、今後の具体的な取組みにつながるような、そんな有意義な討論の場になればと思っています。

まさに現代日本が抱える今日的な問題を議論するに足る、時勢にかなったセミナー、そ



川井 真 主席研究員

してパネルディスカッションになるのではないかと期待しております。その意味において、今回ご協力をいただいたお二人の先生方は、まさしく適任であったと、手前味噌ですが、あらためて感じていたところでございます。

それでは、まずは先ほどの先生方の基調講演を踏まえまして、その内容に関係する部分をクローズアップして、そこから討論に入らせていただきたいと思います。そこで、はじめに理事長の今尾からお二人の先生方に何かご質問をさせていただきます。この質問を

スタートラインにして、パネルディスカッションを展開していきたいと思います。では、まずは理事長、口火を切っていただけますでしょうか。

○今尾 講師先生ともコーディネーターの川井研究員とも何も打ち合わせをしておりません。ストーリーなきパネルディスカッションになると思いますので、わくわくしております。

さて、結城先生には基調講演の最後に、結局、地域社会の中で住みよい地域にしていこうという心があって行動力があれば、それを少しサポートする体制が求められるというお話が出たと思います。その中で、先生が自ら実践されています鳴子の米プロジェクト、そして北海道の長沼農場のご紹介がありました。農協は、いままではどちらかという生産者だけを見ていて、これからは消費者を意識して農を支え、それをつなぐ活動ができるというお話がありました。大変、納得できるお話だったのですが、問題は震災で相当広域に被災してしまった、そういう地域社会を再生していく上で、いま農協は何を一番果たさなければならないのかということでご示唆いただければありがたいと思います。それ以外は、あとで会場の皆さんとご議論させていただければと思います。

○川井 では結城先生、いまのご意見、ご質問に対してコメントをいただければと思うのですが、いかがでしょうか。



今尾 和實 理事長

2 地域社会の再生と農協（協同組合）の役割

○結城 今日、僕は舌足らずで申し上げたことで、果たしてその前提が合っているのかどうか分かりませんが、各自治体の責任者の方などのお話を聞くと、最初はものすごく食料パニックに陥ったというのです。こんなに脆かったのかと。要するに、僕がJAにぜひお願いしたい最大のことは、大きく言えば国民食料の安定です。これがいまは政府がその場限りの対応です。政権が変わればそれっきりだし、霞ヶ関は自分の担当のときの2年が無事であればいいというような、そのつながりで先送りばかりです。その場しのぎでした。誰が、これからの世代やこれからの社会の食べ物をきちっと安定して支えていくのかというときに、それは現場に近いところしかないわけです。

変な施策が次々に来ますが、色平さんによれば首相がコロコロ変わるといえるのは安定しているというような話でしたが（笑）。僕もそう思うけれども、どうでもいいような奴が変わっているだけだという意味ですね。これからはそうでしょう。しかし、僕は最大のネ



結城 登美雄 氏

ックは農業振興という産業論ではなく、人間の存在に関わる大事なものを誰がどうするかといったときに、それは1人でやれよと言いたいけれども、そうはいかないから、一番生産ラインに関わってこられ、それを産品としてではなく、そのために国民諸氏到我々のこの日本という国が持っている食料の現状についてしっかりと伝えていくということが、まず第1点です。ほとんど分からないのではないですか。僕はいろいろなところで話をしても、食料に関して言えば、誰もが何とかできるでしょうと言う。僕は何ともならない道をずっと行っているというように思っています。

そういう意味で、それに政府よ、ついて来いと。そのための前提として、国民全体に農業、漁業とか、一次産業論とか、それを活性化するのにどうするかというよりも、政府の力なんてたいしたことないので、ただ食べる力をしっかりと農業、食料生産の力に合流させていく。そのつなぐ力が、僕がいま農協にやってほしいことです。

それはできなくはないと思います。日本全体ではなく、地域、かつての単協レベルでも

いいし、組織論という意味ではなく、そういうように現場に近いところでやれるところからどんどんやっていく。そして、食べるほうも、僕は鳴子の米の例をやりました(図表1)が、「あんなものを2万4,000円で誰が買うものか」と冷ややかに見ていたんです。しかし6年間、全部完売しています。僕はさきほどの講演で中学生の例を挙げました。あれは、「中学生なんか何も分からないよ」と僕は高をくくっていたんです。しかし、彼らから逆に教えてもらったんです。食べ物は大事だなど。

僕らはただ買ってくれるか、買ってくれないかだけで見てきた経済社会の中で、それよりも食べ物は、もう一つ、別次元のテーマがあるんだ。それはありがたい、これがないと困るんだ、大切なんだと。それを簡単にほかのものに置き換えて、安ければそれでいいだろうとか、高いのは困るとか、うまければそれでいいんだという、非常に商品経済の中に全部ずぶ漬けにしていること。そこから、もう一度、我々の存在と人生と社会と地域において食料というものがその一番の土台を成していることに皆さんの協力ももらいたいということです。

高い値段で買えという話ではないです。誰

図表1 鳴子の米プロジェクト概要

- 生産者価格1俵(60kg) 18,000円を5年間保証(現行13,000円)
- 消費者価格1俵(60kg) 24,000円
- 1俵6,000円の差額は保管料、事務経費や若者の農業支援などに使われる
- 適地適作の品種(東北181号)

(出典) 平成23年度JA共済セミナー、結城登美雄氏講演資料

がどこでどんなふうにして食べ物を支えているのか。それがどういうリスクを抱え、どういう喜びがあるのか。それは単純に言えば、地域を知ることだと思えます。農業を基盤にした地域を知る。そうすることで都市にしようどこにしよう、俺は応援するよ、俺ができることはやるよと。

東日本大震災で、ボランティアがものすごい数で駆けつけてくれ、大変ありがたかった。それは何かできることを理解したからです。あれだけの被災のすさまじさ、そのときに人は動くんですよ。食料は、僕は東日本大震災と同じだとは言いませんが、考えれば考えるほど、相当これは困ったぞという、そのことがいま共有されているのでしょうか。この日本という国において、1億2,770万人のどれぐらいが、食べ物の不安定さとか将来性に対して関心を持っているのでしょうか。僕はそこをJA全体で。そのために生協だとか……。

ここに2012年国際協同組合年全国実行委員会とあるけれども、協同というのはそういうことでしょう。生協であったり、農協であったり、漁協だったり、協同組合が連携して、今やるべきは、わが日本の食料を不安定なところから安定に向けて、生産者だけの頑張りではなく、食べる人もつなぐ人も。利益ばかりそこで目指すのではなく、人間にとっての不可避の物資として。そういう意味で僕は単に付加価値論のような話で食料を論じたくないんです。

色平さんに刺激を受けて乱暴なことを言うと、付加価値論で儲かる農業とか食料を考える考え方はあります。では、儲からない農業

をやっているやつは、ばかではないかというような話になると、長野にいるとか、東北にいる田舎のじいさん、ばあさんはばか者の集まりのようになってしまわないですか。しかし、これは大事な食べ物を孫のために、子のために、世の中のためにというので、年金をつぎ込みながらもやっつけらっしゃる。僕は、その心というものをちゃんと受け止めていかなければいけないと思うのです。

こちらが安ければそれでいいんだというような話に終わらせない。それを経済にしない。おまえさん自身の当事者の問題なんだというところに来なければ……。だから、僕はあえて言うけれども、政治の力よりも食べる人の理解、協力、参加の力に期待したいんです。それをプロモーションしていくのが協同組合というものではないでしょうか。

そういう意味で、准組合員がどうだこうだ、TPP（環太平洋経済連携協定）で変な言いがかりをつけてくるやつに、僕は消費者も組合員になってほしいということなんです。准組合員とかそういうのではなく、農協の組合員です。その力を持って、食料の安定に向かっていくぞと。農水省、民主党、自民党、ついてこいと。その気概を持って、ぜひぜひ行ってもらいたいというのが、僕の気持ちです。あまり答えになりませんが、それぐらい、もうそろそろ暴れてもいいのではないかと思います。

○川井 ありがとうございます。今回ご登壇いただいたのが、地域で地道な活動を続けていらっしゃる結城先生と色平先生ということで、たとえ立場は違っても、お二人のお話を

聞いていて何やら共通する印象を受けるのは、いまのお話しにあった第一次産業、そしてケアを取り巻く労働というものは、地域社会との親和性が極めて高い、まさにローカルな労働分野であるということですね。そして、この二つの産業というのは、いのちと暮らしと言いますか、人間が生きていくために不可欠な要素をすべて内包していますので、このような視点で農業や医療の存在意義を確認していくことができれば、これは誰にとっても理解しやすいであろう、ということは納得できます。ただ、結城先生が懸念されているように、産業論として、あるいは現代経済学的な思考と論理に支配される社会のなかで、これらの話を理解してもらおうとすると、なかなか思考が及ばない人も、世の中には多いのではないかと思います。そういう方々に、たとえば「現在の暮らし、そして未来のいのちを守るために、これらは必要だよ」と認識してもらって、農業そして医療というものの価値を捉え直していただくためにはどうしたらいいのか、結城先生と色平先生にそれぞれご意見をいただきたいのですが、いかがでしょうか。では、まずは結城先生からお願いできますか。

3 産業論だけでは成り立たない農業と医療

○結城 僕の勝手なことから言えば、いわゆる食料の位置づけですよ。産業論として考える考え方に皆、慣れているから。僕はものすごく具体的にいろいろな話をします。たとえば宮城県で海のところにはホヤというのがあります。ホヤの話で、「あれはうまいよね」

「ブランドだよ」とのんきな話をします。ホヤは養殖に何年かかるか。3年かかります。

6月にお店にたくさんのホヤが並ぶと1個100円です。それで、皆は「うんうん、おいしいよね」と言います。では、皆は100円で買うけれども、浜のおじいちゃん、おばあちゃんはホヤでいくらもらっているだろうというと、だいたい知らないのです。「20円ですよ」と言うと、「えっ?」と言うんです。7年も20円が超えられないから、もう辞めようとしていた。これがずっとそういう状況なんです。もう無理だよと何人も辞めていくのを何とかやったけれども、無理でした。「では、いくらだったらやれるのか?」と言ったら、「そんなの無理だよ」と皆、言ってくれません。それでしつこく聞いていったら、「言うだけタダだから言うか」と言って答えたのは、「24円でやります」と。

生産現場の20円を24円にする。そのときに100円のあいだに80円があるわけです。この80円のために20円でやる人がなくなってしまうわけです。いまはそういうことが生産現場で起きているわけでしょう。お米でも同じではないですか。時間給にしたら、179円ではないですか。農水省に行って、「労働基準法違反だろう?」と言ったら、「違反ではございません」と。「何だと」とこちらが色めき立ったら、「先生、農民は労働基準法適用外です」と言う。法律違反ではないから大丈夫だというような、そんなところでごまかすなよ、おいと。

僕はなぜ（鳴子の米の生産者価格を）キロ1万8,000円にしたかということ、最低賃金の687円にしたときに、1俵1万8,000円になっ

たんです。最低賃金ですよ。つまり、農業というものの労働評価です。違いますか。物の評価でしょうか。最低賃金で確保したいという、それが確保されもしていないのに、安ければそれでいいとか、数字だけが勝手な色分けをされてしまっている現状に、それを知らない人たちに対してホヤの話を出したり、お米の話を出すと、僕は鳴子のお米がもう少しまくいったとしたら、嫌になるほど食べて買ってくれる人に食べ物のお話の現場の値段であるとか、こんなこと、あんなことを話したら、「知らなかった、知らなかった。私は何をしたらいいか」と。「10キロでも15キロでもこの値段で買っていただけると、農家は続けられます」と。「それなら買います」ということで、8割は予約になったわけです。それで子どもが手を合わせて「ありがとうございました」と言う。何も分からないのも手伝いに来るわけです。

あえて言いますが、産業論だ、何だと皆さんは勉強し過ぎているから、人間の生きるための食べ物の大切さというものを共有できないで、どんな展望を描けるのでしょうか。そうでないと、あちらの安いほうがいいではないかとコロッと変わるだけでないでしょうか。答えになりませんが。

○川井 いえいえ、とても説得力のあるご意見です。ありがとうございます。同様の質問で色平先生、いかがでしょうか。医療という立場から。

○色平 似ているところがあると思います。医療は厚生労働省の管轄下ですが、同じよう



色平 哲郎 氏

な話で医療関係従事者は労基法適用除外になってしまっていますよね。つまり、あれを厳格に適用すると病院は立ち行かなくなるわけです。看護師さんたちは特に大変ですけれども。

日本政府は、その場限りでいろいろなことを言いくるめて来ていたということですね。聴衆の皆さんは、産業分野においてになる方が多いと思うのですが、^{おんなしゅう}女衆の現場は子育てだったり、老人介護だったりしていて、そこにいずれ皆さんも帰っていくことになります。今日の結城さんのお話の冒頭は企業社会になって地域社会から離れたということですが、皆さんもいずれ地域社会に戻って老人になったときに、皆さんが気づいたときには遅いかもしれないですよ。「弱者」として医師と向き合ったときに、お医者さんが「言い値で」いいように言ってきて、皆さんが抗弁できなかったら「医者どろぼう」になってしまうんですよ。いまは皆さん、そうはなっていないですけども。いまの医療への規制というのは、医師の手足を縛るやり方であって、規制緩和すれば我々医師は楽になるんですよ。でも、その分、皆さんは絞られてしまいます。戦前の社会、「医者どろぼう」

の社会に戻ってしまうということですね。

心意気の問題なのかもしれないのです。さきほどの結城先生の最後のところでCSA（図表2）という話がありました。地域で支え合う農業がアメリカでは動いている。私がこれを最初に知ったのは、「エンデの遺言」という映像で、若者たちがカリフォルニアから移り住んで、地域の人たちに支えられながらリスクを皆で取って農業に取り組む。このリスクを皆で取るというあり方は、社会保険そのものなんですよ。すべての人が食べなければ生きられないと同じように、すべての人がいずれ生老病死を受け入れざるを得ない以上、お金のある人だけが、というようにするのは、皆さん自身の基盤を切り崩してしまうことなんです。宇沢（弘文）先生は飲み友達でしたけれども、元東京大学経済学部長としての彼の存在が揺らいだらすぐにも東大出身の“現在官僚”や“過去官僚”が変な施策を打ち続けている…治療法として間違っただけをやりようとしているのを、せめて止めさせないといけな。そのように思っています。

さきほどの結城先生の講演のスライド（図表3）の中には、1、2、3とありました。東京は1%で、大阪は2%で、神奈川は3%ですね。ということは、そのまま県境を閉ざすと、東京の人は99%が飢え死にすることです。放っておいたらそういう状態になっているということについての危機感…。世界に対して、同じことを我々日本人はやっているということです。日本があれだけ輸入しているということは、どこかの食べ物を奪っているということになるので、ホクホク顔で売ってはくれますけれども、その後ろでは飢餓を生んでいるということは当たり前のことです。日本が買い付けモーションに入っただけで米価が国際市場で上がってしまうので、どこかで飢え死にが出かねないというのは世界の常識なんですよ。

外を考えると、世界の人々の悩みというのは、我々が産業論的になかなか解決できないようなところをずいぶん転嫁されてしまっていると思います。男性が女性たちに転嫁しているのと同じだと思います。私は今回「反産

図表2 C・S・Aとは？

Community Supported Agriculture
地域で支え合う農業

近代農業が見失った農の基本を取り戻す

- ①十分な量と多品目の野菜を地域や都市に供給する
- ②自然環境の保全
- ③希望する人々に自然とともに働くという教育的経験の場を提供

※低所得者への割引や、作業との交換

（出典）平成23年度JA共済セミナー、結城登美雄氏講演資料

図表3 都道府県別食料自給率

北海道	195	東京	1	滋賀	51	香川	36
青森	118	神奈川	3	京都	13	愛媛	37
岩手	105	山梨	20	大阪	2	高知	45
宮城	79	長野	53	兵庫	16	福岡	19
秋田	174	静岡	18	奈良	15	佐賀	67
山形	132	新潟	99	和歌山	29	長崎	38
福島	83	富山	76	鳥取	60	熊本	56
茨城	70	石川	49	島根	63	大分	44
栃木	72	福井	65	岡山	39	宮崎	65
群馬	34	岐阜	25	広島	23	鹿児島	85
埼玉	11	愛知	13	山口	31	沖縄	28
千葉	28	三重	44	徳島	45	全国	39

（出典）平成23年度JA共済セミナー、結城登美雄氏講演資料

運動」という言葉を皆さんに何も説明せずに使ってしまったが、「反産運動」という言葉は皆さん、もちろんご存じですよ。産業組合に対して生意気だとか何だとか、戦前すごい難癖がつけられて、いまで言う反農協運動のことです。戦前からなぜそういうことが繰り返し行われているのかというと、皆さんに正義があるからです。その正義は我々自身の今後をどのように担保するのかという取り組みにつながる。リスクを分散するやり方は、そのリスクで金を儲けようとする人たちにとってみると邪魔なんですよ。

そういう意味で、我々は資本制とどうしても相対峙しなければいけないところがある。このことは、左翼だから言っているのではなく、愛国者として絶対に必要なことだと思いますので、ぜひ皆さんに奮起いただきたいものだと思います。

○結城 一つだけ加えると、いま260万人の農業者がいます。半分以上の139万人は、70歳以上です。年代別にいくと、39歳以下は23万人です。それこそ色平さんではないけれども、半分はあと10年経ったらいるかどうか分からないんです。39歳は49歳になるかもしれないけれども、そのあとはどんどんいないわけで、そうすると、同じ39歳以下の人間は日本社会にどれくらいいるかというと、子どももそうだから5,700万人います。次の世代の食料をどうするのかなど、誰も考えていないわけです。そういうことを考えなくていいのですか。

それで毎年、39歳以下は1万人ぐらいずつ辞めていくわけですよ。それはなぜ辞めてい

くかということ、やり切れないから、金にならない、生活できないからです。だから、必ずぶつかるのは、すぐに産業論というように言うのは、企業社会の中での話であって、地域社会をベースにしたときに、僕は企業社会の論理の勝手な押し付けで処理しなされるということが一つあるんです。

いま我々は今日も僕らはいいい歳をして、目の前をしのげばいいというので、そのうちに何とかなるんだと、ものすごく無責任な形で食料の問題に対応しているんです。だけれども、とんでもないことです。だから、若者が、やばいと思った人間たちが農地に向かったり、農村に向かったり、山村に向かったりする動きは、生きる糧さえも保障されないこれからの社会では俺はダメだから、自分の食べ物は自分でつくるといような志向が少しずつ広がっている。彼らは農業でものすごい金を得られるなど、そんな幻想で動いているのではないです。自分の人生を全うするためにも、食べるものにすら事欠く国で保障されない国で生きていくのはいやだから、わが手で食べ物をきちっと賄える技と場を持ちたいという。それは若者のブームでも何でもないです。そういうのではなく、彼らの一つの危機感の裏返しとして農村に近づいている。そのことを我々は変な産業論でばかり論じること慣れ過ぎてしまって、次の世代が生きていく上での基盤の脆さに本当は責任があるはずなんです。そういうことをちょっと言いたかったんです。

○川井 ありがとうございます。私としては、結城先生がお話になったこと、色平先生

がお話になったことは、もう本当に、すっきりするほど気持ちよく入ってくるのですが、ただ、これがいまの時代を生きる人々の共通観念・共通認識になり得るのか、さきほど結城先生もおっしゃられましたけれども、いまの企業社会では、農村へと意識が向かいはじめた一部の人々を除いて、いわゆる都市中心の市場システムに生活のほぼすべてを依存して生きている人が大半を占める世の中で、どうやってその価値を理解してもらったらいいのだろうか、と、常々悩むのですね。

この都心で生きている人の大半は、たとえば食料がこれから枯渇して、自分たちの食べるものがなくなるとか、医療にかかりたいときに病院がなくなるとか、あるいは、さきほどのヘルパーの話ではないですけども、自分も認知症になるかもしれないし、また親が認知症になって突然転がり込んでくるかもしれないということ、を、たぶんリスクとして捉えきれないような気がします。それは想像力の欠如なのかもしれませんが、ただ、この問題は、看過してはいけない非常に重要な問題だと思っています。

特にいまリアリティを増してきているのは、たとえば、これまで休暇制度というと主に女性の出産・育児休暇などが話題に上りましたが、いまは長期介護休暇の制度化の議論へと、問題の焦点が移行してきています。さらに、その長期の介護休暇を余儀なくされる人たちの多くは、組織の主要なポジションに就いている人たちであって、すると組織は回らなくなる。これは組織が抱えるリスクでもあるわけですね。企業社会でも、水面下では、とても身近な問題になってきている。

そういう事態に陥ったときに「さあ、どうする」と慌てても、すでにリスク回避の道は閉ざされている。ケアの問題についても、食料の問題についても、皆が気付いたときにはすでに遅いというのでは、これはまずいな、と思うわけです。そう考えると、いま結城先生が丁寧にお話ししてくださったこと、また色平先生がご説明してくださったことを、私たちとしてはどんな言葉で、どういった方法を用いて伝えていったらいいのか、そろそろ主体的に思考を巡らせ、実行に移していかなければなりませんね。

たぶん、この会場に来てくださっている方々は、先生方のお話しをかなりリアルに受け止めてくださっていると思います。なぜなら地域とともに歩んできた協同組合の仲間たちですから。だからこそ、いまここにある力を統合して社会的発信力を高めていかなければならないと思いますし、いまのお話を聞いて、まさに我々が主体性を持って考えていかなければいけないテーマだと、あらためて痛感しました。今尾理事長、いかがでしょうか。



○今尾 いまの話は私が色平先生に質問したいことに関わっています。先生は、最後に医者が地方で暮らす、あるいはある地域で暮らす。腕のいい医者を取るのであれば、その医

者が成長できるような環境を揃える必要がある。給料だけではなく、自分のキャリアアップできるような、そういう大きな度量を持つ必要があるというお話でした。これはたぶん厚生連を運営している方たちには、すごく響いた言葉だと思います。

全共連の創始者の1人である黒川（泰一）さんが、賀川豊彦の指示で中野協同組合病院をつくりました。いま佐久病院は日本の協同組合病院の草分けということで、たぶん今日来ている年配の方は、ふっと自分が死ぬときのことを考えたときに、佐久に引っ越そうかなと思った方もおられるかもしれませんが、こういうことを聞きたいわけです。

ここで少し脱線しますが、かつて厚生連の病院を建て替えたいのだけれども、金がないから組織で負担できないかという相談を受けたことがあります。それは私どもというよりも、連合会もそういう癖がついているんです。何か困ったときに余裕のありそうな団体とか、あるいは奉加帳で事業量に応じて回す。それで出捐とか出資してもらって、病院を建て直す。こういうお話で、いま川井研究員の言ったのは、医療とか福祉とか介護、こういう世界は必ず誰もがぶち当たるので、この地域社会から病院が消えたらえらいことになる。拠点病院がなくなってしまう、あるいは基幹の病院がなくなってしまうことになる、大変なことになるということは誰でも分かると思います。

そういう分野で協同組合の原点ができるのではないかと思っかけて、組織に奉加帳を回すのではなく、そこの地域の方々に、この病院はこうしたいので、あなたは出資してください。それは組合員であろうが、何だ

ろうが皆でいいと思いますけれども、地域の住民が全員、組合員になって、俺たちがこの病院を守って安心な過ごし方をしたい。それがおそらく私は協同組合の原点運動になると思っているのですが、そういう点について、地域社会で皆が組合員になって、自分たちの健康を守っていくことが構築できないかどうか。

4 地域で医者を使いこなして欲しい

○色平 「雨ニモアテズ」をちょっと読んでみましょう。「雨ニモアテズ、風ニモアテズ、雪ニモ夏ノ暑サニモアテズ、ブヨブヨノ体ニ、タクサン着コミ意欲モナク、体力モナク、イツモブツブツ、不満ヲイッテイル、毎日、塾ニ追ワレ、テレビニ吸イツイテ遊バズ、朝カラ、アクビヲシ、集会ガアレバ、貧血ヲ起コシ、アラユルコトヲ、自分ノタメダケ考エテカエリミズ、作業ハグズグズ、注意散漫スグニアキ、ソシテスグ忘れ、リッパナ家ノ、自分ノ部屋ニ閉ジコモッテイテ、東ニ病人アレバ、医者ガ悪イトイイ、西ニツカレタ母アレバ、養老院ニ行ケトイイ、南ニ死ニソウナ人アレバ、寿命ダトイイ、北ニケンカヤソシヨウガアレバ、ナガメテカカワラズ、ヒデリノトキハ、冷房ヲツケ、ミンナニ、勉強勉強トイワレ、叱ラレモセズ、コワイモノモシラズ」と。

これは私のことですがけれども、このギャグは医師にも当てはまりますね。お医者さんは若いころから先生と呼ばれ、日本語も不自由ですし、人の気持ちも分からない。英語と数学と物理があそこまできたら、日本語のしゃべりはムリというもの。皆さん、高望みし

過ぎぐらいでしょう。話のうまい医師を求め
るのであれば、医大に「吉本粹」があったほ
うがいいぐらいですよ。

つまり、お医者さんは、人非人なんです。そ
の人非人をどういようにほだして、皆さん
が飼いならして翻訳して、村人の言葉を医
者語に翻訳するのかと。普段、看護師さん
たちは非常に苦勞していますけれども、こ
ういう女衆たちが何とか医師を使いこな
しているところ、男衆も入ってきてほしい
ですよ。それは参加するとすぐ分かるん
です。こういう人たちと付き合いたくない
な。しかし、こういうイヤな人たちのオ
ペをする能力や処方する能力を使わな
ければ、自分の老後が安泰ではないとい
うのは、一種セキュリティ状況です。隣
のお国・中国と付き合いたくないけれど
も、付き合いしないとセキュリティ状況
がということと同じですよ。

ということは、こういう思いでいるんだ
ということを医学生のうちから伝えていく
ことが大事なわけです。それは問はず語
りで私ではなく、「色平はあんなことを
言っているけれども、こんなひどいところ
があるんだよ」ということを村のおじい
さん、おばあさんに伝えてもらうとか、
というようなことは絶対に必要なこと
なんです。そんな意味で、農村医科大学
ということが実現できなかつた。まあ、
できてできなくてもいいですけども、
皆さん方の思いが伝わるようなお医者
さんが存在しないということは事実であ
り、いよいよそうなっていますから。

皆さんご自身が必死に勉強して、難
しい試験を受かって、必死に修行してま
ともな医者になったらどうしますか。そ
したら田舎に行

かないよ。要するに、本音の話なんです。
つまり産業社会の論理で皆が考えてい
るような、老後の安泰が得られないこと
は確実なんです。それをどうしたらいい
のかということ、皆さんの先人が必死
に考えて、自らお金を集めて医療機関
をつくったということ。あるいは共済
そのものが、皆保険制度の基礎にな
ったわけでしょう。そんなことを、私
は口幅ったく書いておきましたけれど
も、これは皆さんの先人がやった仕事
ですよ。そこに我々の叫びがあったのだ
と。我々は別に優しいお医者さんでも
なく、組合員に使われているわけだか
ら仕方なくそうしているわけですよ。

そして、このように使われることに慣
れたお医者さんたちは、職人氣質とも
言えないと思いますが、のちに開業し
たら成功するよ、と、若者の心をく
すぐることができるんですよ。すべて
の日本の医師たちに、一旦、皆さん
方のつくった厚生連病院で働くことを
義務付けてしまえば、もう少し気持ち
の分かるお医者さんになることでは
しょうね。なぜなら、皆さんがオー
ナーなんだから。そうかと言って、
オーナーがあまり強く出ると医師は
逃げてしまいますけれどもね。

皆さんのいいところも悪いところも、
地域社会のいいところ、悪いところ
を、感じ取ることも現在の医科大学
にはできないんです。医師たちは技
術には関心がありますけれども、地
域とか保険とかには全然、関心がない
んです。お金の流れがどうなってい
るか、全然分からない。産業社会が
行きついたら、我々の老後とか子育
てはしきれなくなってしまうのです。
女衆は、口にできないところで、
それを思い悩んでいると思います。

もう一つ、うちの女房がいつも言うことですが、家族を長持ちさせるコツは何ですかと。それは「^{エイ・ケイ・エイ}A K A」です。AKAというのは、AKBではないですよ（笑）。AKAです。あてにされていない、期待されていない、諦められている、旦那、ということ。あてにしない、期待しない、諦める。この三拍子があるのが、家族を長持ちさせるコツですよ。皆さんは医師に対して妙な幻想を抱いてはいけません。テレビにはイケメンで、綾小路（きみまる）の話術を持ち、利根川進の頭で、ブラックジャックの腕というような人しか出てきませんが、そんなのがテレビで出た翌日に外科医の仲間がどうなっているか分かりますよね。皆さん、のけぞっているわけですよ。患者のほうも、「うーん」と思っているし、医者の方も、見たかなと思っている（笑）。

そういう、つまり等身大の医師がベストを尽しているということの認識がないと破綻します。さきほどだいぶ申し上げましたけれども、でも皆さんが雇っているお医者さんはかなりのレベルなんですよ。皆、良心的なんです。それを社会的にどう使いこなすのかというのは、皆さんの腕次第であって、それをやったからこそ、戦前の産組が、おっしゃったように、中野総合病院をはじめ、あちこちで病院をつくっていったわけです。そして、現在はそれが皆保険制度につながって、50年経ったがゆえに、皆、その原点を忘れてしまったんですよ。あるのが当たり前なのだから。

私にとって女房がいるのは当たり前です。彼女が実家に帰ったら、もう大変なのは明らか

かなんですけれども。あてにしない、期待しない、諦める、の感覚で医師と付き合う。この人は変わった人だけれども、いいところを認めてあげないと逃げてしまうから。

おちゃらけ話にしてしまいましたけれども、ぜひ皆さん方が主体性を持って医師を使いこなす。お金を出資して、あなたこそが大事だと。でも、あなたのこういうところについては、出資者としてひと言、言わせてほしいという。（岩手県）^{さわうちむら}沢内村（現・西和賀町）の村長が昔やったような仕事ですよ。ぜひそんな作法を取り戻していただきたいと思います²。

○今尾 ありがとうございます。厚生連病院を我々の先輩が自らつくって、50年経ってしまったら忘れてしまったということでは困りますので、きちんとしていかなければと思います（笑）。

○色平 そんなことを言ったら首になってしまう（笑）。

○川井 ありがとうございます。非常に分かりやすいお話だったと思うのですが、色平先生、最初から「自分は医師になるんだ」という志を持って医師を目指す人というのは、そんなに少ないものですか。

5 初めから医師になる志を持って、 医師を目指す若者は少ないのか

○色平 それは昨日も共同通信のインタビューを受けたのですが、お医者さんたちという

^{ふかさわまさお}
2 沢内村の村長であった深沢晟雄（1905-65）氏の活動については、及川和男（2008）『村長ありき－沢内村 深沢晟雄の生涯』れんが書房新社を参照願いたい。

のは、一種、良心的な人が多いんですよ。ブラックジャックでもそうですけれども、何かいいことをやりたいんです。ところが、「医師会」と「医学界」しかなければ、それはなかなか果たせないんです。医師会というのは医療技術をお金儲けの道具にしてしまっているし、医学界というのは医療技術を権威付に使っているわけです。この二つだけでは、若い医学生たちの気持ちは、全員ではないと思うけれども、志がまっとうできないんです。だからこそ、厚生連病院なんです。あるいは、医療技術の協同化なんです。

医師不足を解決するにはどうしたらいいかといったら、これは簡単です。経産省的には、医師を輸入するか、患者を輸出すればいいんですよ（笑）。それはできないですよ。日本は日本語でやっているんだから。そんな安易な人たちがやっている産業政策で皆さん、満足しますか。日本人の半分はがんにかかり、三分の一はがんで死ぬんですよ。皆さん、この中の半分はがんで、がんだと言われて「ガン」となって、何も覚えていないのが、患者の心理なんだから、あとは医者がかくちやくちやく15分話しても何も覚えていないですよ。ちゃんとそれを翻訳してくれるような弁護士役がいないと、皆さんは安心してあの世に行けないんです。

いまの保険医療政策では、皆さんのベッドはありません。どんどん減っていつている。死亡者は毎年2万人ずつ増えているのに、ベッド数がどんどん減っているんだから、都市近郊はもうアウトなんですよ。行き場がないわけです。だから佐久病院に来てくださいとは言いませんけれども（笑）。

この間、岡田（克也）副総理が私たちのところに来てのけぞったのはそれですよ。私の講演資料（参考資料2）の後ろのほうに書いておきましたけれども、来ていただいてうれしいですけれども、別に安い医療費だというのは、要するに長野の医者たちがアホだったということなので、これは日本の医療が市場化されていないからできているのであって、ちょっとでも市場化されたら、私だって…声はかからないと思うけれども、声がかかれば都会に行きますよ。給料が上がるんだから。

薬というのは商品です。技術であると同時に商品です。皆さん、どうですか。がんだと言われて、この治療法は松、竹、梅なんですけれども、どれがいいですかと言って、「これは保険ですけども、梅だけです」と言われたらどうしますか。口を開けたままで、インプラントはいいですか、何とかと言われたら、「うん、うん」と言うしかないんですよ。歯科はそうなってしまっていますけれども（笑）。

とにかく、笑いごとのようなことがアメリカではいくらでも起こっているわけで、中国もそうです。そんな話になりますよ。世界の大国が、そして世界中がそうになっているわけだから。わが日本の持っている、この当たり前の超安定したあり方というのは、かろうじ



(参考資料2) 平成23年度JA共済セミナー、色平哲郎氏講演資料

副総理来訪ほか—佐久病院の近況報告

色平 哲郎

春は、旅立ちと訪れの季節だ。「変化」を最も体感できる時期でもある。

長年、「地域密着医療」と「急性期医療」の二足のワラジを履いてきた佐久総合病院。今月、急性期医療部門を集める「佐久医療センター」の建設工事が始まった。本院から北へ7キロ離れた佐久平に2年かけて佐久医療センターはつくられる。広域的な医療ニーズを受けての分立だ。二足のワラジは、少々離れても履き続けると伊澤敏病院長はじめ職員は、気持ちを新たにしている。ますます地域密着医療の比重も高くなる。

そんな矢先、十数年間にわたって山間地域の医療を支えてきた同僚の長（ちょう）純一医師（45）が、佐久病院を休職し、宮城県石巻市の約1900戸の仮設住宅が集中する「開成地区」へ赴くことになった。東北最大規模の仮設住宅地域に設立される石巻市立病院の仮診療所長として、移り住むというのである。佐久病院の仲間としては、痛い！ じつに痛い！ 佐久はこの重大時期に、この大きな人材を、一定期間、欠くことになるのだ。

長（と、いつものように敬称抜きにさせてもらう）との思い出は尽きない。JR小海線の駅舎にある小海診療所を拠点に在宅医療を展開してきた長のねばり強い活動は敬服するばかりだった。365日、24時間、訪問診療を行っていた。訪問診療が途絶すれば、即入院という患者さんが常時10人はいる。その穴を埋めるのは大変だろう。

でも、長は、東北の被災地を訪れ、「このまま何もしなければ、お年寄りや劣悪な環境に置かれる」と実感し、そこに膨大な医療ニーズがあることを知って決断した。

佐久病院を育てた故若月俊一先生は、こう語っている。「弱い者を支えるのが人間の義務であり、民主主義の精神であり、また協同の精神でもある」。若月先生の最後の弟子世代の長は、この語録そのものの選択をした。

佐久病院の職員一同は、長の奮闘を期待し、温かく送り出そうと決めた。このあたりが、浪花節がいまも通用する佐久病院らしいところだ。生き馬の目を抜くような医師のヘッドハンティングとか、引き抜きといった類とは、全然違うのである。

去る者がいれば、逆に政府の要職に就く方にお越しいただきびっくりすることもあった。2月18日、岡田克也副総理が、佐久病院を訪問され、在宅医療を担当する地域ケア科、ドクターヘリを運用する救命救急センターなどを視察した。熱心にヒアリングされた岡田副総理は、自身のブログにこう書いておられる。

「佐久総合病院というのは、昔から地域密着型の医療で有名です。医療関係者と看護師の皆さんが地域に溶け込み、それぞれの地域やご自宅に足を運ぶかたちで、濃密な地域医療を行ってきました。そしてそれが、大きな成果を上げてきました。いま、『社会保障と税の一体改革』の中でも、そういった地域単位での医療・介護を行っていくということに重点を置く方向性が出されています。そういう中で、介護は訪問看護、医療は在宅医療ということをして1つの柱としているわけですが、これは佐久総合病院の取り組みなどを参考にさせていただき、厚労省においていろいろな検討を行った結果、出てきた方向性です」

さらに長野県の医療費の「安さ」も副総理は強調しておられる。ありがたいご評価をいただき、身の引き締まる思いだが、医療費を下げるために在宅医療に力を入れてきたわけではない。たまたまの結果なのだ。

現実の佐久病院は、増大する医療需要に、医師の数が追いつかず、多くの診療科でいままも募集中。信州であるべき医療の形を実現するために苦勞を共にしてくれる医師は、いらっしやらないだろうか。

（『日経メディカル』2012年2月25日）

て老後が安泰だとか、義務教育が機能しているとか、インフレやデフレがあまりそれほどひどくないとか、こういう前提は世界では通用しませんので、ぜひ皆さん方の社会人のお力で、我々、比較的、分かりますよね。昔は頭が良かったはずなのに、大学を卒業して病院の中で先生と呼ばれるほどのアホじゃなしというように、若年寄になってくる人をうまく使っていたかかないと、実は皆さんの老後はない。よろしいでしょうか（笑）。

○川井 ありがとうございます（笑）。もう1点だけよろしいでしょうか。今回の色平先生のお話、そして結城先生のお話の中に、何か共通する世界観のようなものを感じたのですが、たとえば、お互い様とか、自助、互助、共助とか、そういったお話が出てきましたが、まさに人間の関係性にかかわる部分です。私はあまり道徳という言葉は好きではないのですが、ただ、その感覚や感性のようなもの、社会を円滑に機能させる術のようなものを養うために、地域社会は何らかの役割を果たしているのではないかと感じるころがあって、過去の記憶を辿っていたところです。

私の実家では、年末になると近所の植木屋さんに庭木の手入れをお願いしていたのですが、私が小学校2、3年生の頃だったでしょうか、祖母と二人で縁側に座って、その植木屋さんの仕事を眺めていた時のことです。祖母がニコニコうれしそうにしているので、「何がうれしいの？」と尋ねると、祖母は「見てごらん、植木屋さんが一生懸命に働いているよ。なんと気持ちがいいんだろう」と言うのです。そして続けて、「おまえも一生懸

命に勉強して、一生懸命に働いて、みんなを楽にしてあげなきゃね」と語りかけてきました。今になって考えてみれば、これは祖母が持っていた労働の概念であって、「働く」とは社会を豊かにすること、すなわち“ハタ”を“ラク”にすることなんだ、という認識を持っていたのでしょう。

子どもというのは単純なもので、このとき、「そうか、僕が勉強して、僕が働くと、みんなが楽になるのか」と、祖母の言葉を何の疑いもなく、素直に受け止めたことを、いまでも憶えています。ただ面白いことに、そのときの「みんな」という言葉のなかに浮かんできたのは、お世話になっている大工の棟梁だったり、近くの八百屋のおじさんだったり、隣の駄菓子屋のおばさんだったりするわけです。これが当時の私のなかの「みんな」だったのです。この「みんな」という感覚を養うために、地域社会あるいは労働というものが、何か重要な役割を果たしているのではないかと、そんな気がちょっとしたのです。

少し情緒的で観念的な話題になって申し訳ないのですが、地域社会と地域での労働というものには、何と言いますか、感性を育むと言いますか、社会を維持していくために必要な感覚を養うと言いますか、まさに自立していくための刺激のようなものがあって、それは地域で暮らす人間と人間の相互行為によってもたらされ、地域社会のなかで形成されていくものではないかと感じるのです。核家族よりも3世帯同居が良いとか、そんな家族社会学的な問題ではなく、もう少し広い意味で、地域というすべてを包摂した空間のようなものが、何か別の役割を果たしているよう

にも感じるのですが、結城先生ならどのようにお考えになられるでしょうか。

6 地域とは何か

○結城 地域とは何だというと、たいいてい遠く離れた人はエリアで考えるんです。ここからここまでは多摩地区とか、広かったり、大きかったり、空間概念でエリアでとらえます。しかし、僕は中山間地だったり、いろいろな限界集落だとか、過疎だとか言われているところばかり回ったせいかわかりませんが、地域とは家族の集まりだということに思いました。そうすると、独り暮らしの家族もあれば、かつては多かったけれども出て行った家族もあるけれども、それも家族。

そういうので調べていくと、どういうことが出てくるかということ、日本という国がどういう国だったかということ、明治は間違いなく9割、昭和になっても85%ぐらいまでは農山村、漁村に住んでいました。町に住むのはほんの少数派でした。明治のはじめ、村の数は7万1,314あったそうです。その村の平均的な大きさというのは、60戸から多いところで70戸。人口にして370人前後、これが村の基本的な形だったそうです。

それが7万1,314の村で、3,000万人の人口のうちの、たとえば明治のはじめは2,700万

人を構成していたというのです。それが日本の社会の何百年も続いた地域社会の原型であります。それが30年代、40年代に、東京に行ったほうが金になるということで皆、出てしまって、それを過疎と呼んだり、限界集落と呼んでいるだけであって、地域社会は70組、60組の家族の集まりなんです。その家族が、ここで別に補助金も何ももらわず、企業もないのに、山の手入れをしたり、薪や食べ物をつくる。そうすると、家族とは何かというと、一緒に耕し、一緒に食べるものたちという意味だそうです。それはファミリア (familiar) というラテン語から英語のファミリー (family) というのが生まれてきますけれども、同じファミリアからもう1人子どもが生まれて、それがファーマー (farmer) なんです。ファーマーとファミリアは同一語源のラテン語なんだそうです。

そこで思いあたることがありました。そういえば、僕らは小さいときに一緒に耕し、一緒に食べるものたちの家族の集まりが、わが山形の山奥の村の姿だったなと思ったんです。それで家族は6、7人ぐらいですから、おじいちゃんが寝たきりになるとおばあちゃんが介護に回って、家族がケアできていた。いまは1人暮らし、2人暮らしだから、公的ないろいろなものが出てくる。



そういうようには思いますけれどもね。そういう家族の願いの中で、あるいは困ること、悩みや困りごと。あるいは期待や願いをどう実現していくかということが、地域づくりです。だから、全部根付いているのは、そこに暮らす家族の願いや悩みに基づいています。そのことを受け止めないと。それを戦後の高度成長経済社会下では金が何でも解決してくれると思ったんです。金が全部を解決するから、金だ、金だ、と来てしまったわけです。

しかし、金によって解決できないものもあるということは、たぶん皆さんも分かるし、では金がなかったら、これは問題だから誰かやってくれというように排除したりするようになっていったわけで、そこで殺伐たる社会が生まれつつあって、見通しのない、展望のない社会になっているようにも、僕は感じます。だからもう一度僕は……。

そして、そのときに次の子どもたち、次の家族はどう生きるだろうか。そんなことを皆、村の家族は考えていたんです。そのために親は金をコツコツ貯めて、300年持つ家を建てた。その息子は、親が建てたやつに俺が調度品をやったよと。次のあれはどうしたと、次を生きる者のために常に準備していたのが家族だったわけです。でも僕らは社会だとか政治だとか、経済とかと、そちらのほうに委ねているけれども。だから、僕はそういう意味での家族というものを地域の原点においたときに、そこが必要としているものの、一番大事なものとして食べるということとを、まず、第一義にあげたわけです。

そのために、さきほど佐久に引っ越す人が

多いのではないかと今尾理事長がおっしゃったから言いますけれども、これからは食べ物に関して言えば、三つしか道がないといまのところ思っています。第一の道は、自分の食べ物は自分でつくるという自給の道です。だから市民農園が増えていくのは趣味の問題もあるけれども、そうすると、どういうことが起きるかということ、いま東北なんかにも広がっている耕作放棄地をそのまま放棄しないで、田園住宅にしていきたいというのをJAにお願いしたいんです。農地付住宅です。だいたい1反歩です。1町歩に10軒の住まいというのがそこです。そうすると、7世帯か8世帯あると、だいたい食べられるんです。

そういうことをやると、企業社会にいながら、フランスは郊外に住むよとか、ヨーロッパもそういう動きがありますけれども、日本もそろそろ震度7が来るようだし、田園住宅にしようかと。それを僕は早稲田大学の建築の連中と一緒に、「1,000万田園住宅構想」というのをつくりました。今日、この話はできませんけれども、そういう意味で、農地のあり様に対してそういう道筋をJAが示してくれると。それが1番目です。

2番目のあり様としてはCSAという、自分は引っ越しもできないし、田園住宅も行けないけれども、私に代わって食料をつくってくれる人を私はサポートしますという第2の道です。これは東京の人たちが少しマンションで組んだり、地域で組んだりして、この地域の食料はあちらの農家、こちらの農家に。そのあいだをJAがつかないでもらいたい。

3番目は、農水省というのは産業論から生

まれた省庁です。一次産業をいかに伸ばすか。一度もうまくいったことがないんです。残念ながらとすべきなんでしょうが、ないんです。それを僕は乱暴なことを言いますと、食料省に変えたほうが良いと思っています。国民食料の安定供給を最大の理念にした省庁再編です。食料省外務局、食料省経産局、食料省厚生局、食料省消費安全局というように変えて、最大の目標はそのために社会資本最大のインフラなのだから、公的費用をきちんと国民食料の安定のために堂々と投資すべきだというように思っています。

そういうことを本当は農協が、JA共済総研あたりがガンガンあちこちで言いふらして突き上げて行けば、ノーと言える時代ではないような気がしています。そういうように乱暴者は考えます。

○川井 ありがとうございます。お言葉、しっかり受け止めました。さて、このあたりで会場からご意見、ご質問をいただきたいのですが、ぜひお二人の先生方にお話しをお聞きしたい、という方がいらっしゃいましたら挙手していただけますでしょうか。

7 会場からの質問

○質問者 素晴らしいお話をありがとうございました。私が意見として申し上げたいのは、今朝方、漁業のシンポジウムに出てきました。(岩手県) 田老町の組合長が、10メートルの堤防を超えた津波の話、全滅した中で一生懸命に立ち上がっている姿、その中で日生協とか岩手生協の応援をいただいたとか、フランスのブルターニュなどあまり裕福では

ないところからかっぱとか、救命道具とか、防寒着をいただいたとかいう話がありました。さきほど結城先生が、協同組合運動が大事だということで、この協同組合年に向けて本当に素晴らしい動きがあると思いました。

その一方で、私はいろいろなところでシンポジウムに出ているんですけども、こういう話がありました。(宮城県) 石巻の先生が、シンポジウムを終わって、その仲間とその先生は東京の池袋を歩いた。そうすると、もう東京の人たちは震災のことを忘れて楽しそうにしていると思ったそうです。「私たちはさみしい」と言われたんです。片一方でもう一つは、(福島県) 相馬のNPOの方で応援している人なんですけれども、この方が今度、原宿を歩いたんです。原宿で一緒に食事をしたんですけれども、この方も同じようにさみしい思いをしたと言っていました。東京の人たちは私たちのことを忘れていてのではないかと、こういう面もあるんですね。これが怖くて、たとえば明後日(3月11日)、いろいろなシンポジウム、いろいろな集会があると思うんですけども、1年の式典が終わったら、皆、忘れてしまうのではないかと。

その中で、さきほど先生がおっしゃった食料の安全とか、これは大事ではないかと思えます。というのは、やはり私の知り合いで、For YouからWith Youという言葉を使っている人がいます。あなたのために寄付をします、あなたのためにというのではなく、一緒に乗り越えていきましょうと。

食料が大事だということをおっしゃったように、たとえば北海道の十勝の仲間、ニワトリをむしるところを中学生や小学生に見せ

る友だちがいるんです。そうすると、命の大事さのようなものを知って、ニワトリも手を合わせながら食べるとか。あとは金子みすゞさんの詩で、イワシが海の中で大量死していると。あれは最初、私は漁師の息子なので腹が立ったんですけれども、あれはやはりお魚を殺しながら、命をいただいているということに感謝する、そういうことだと思えます。ですから、そういう食育とかは非常に大事だと思います。

共済団体でもありますけれども、そういうFor YouからWith Youで、一緒になって乗り越えていきましょうということを国民に向けて、我々団体もそうですが、先生方もまた講演されるときに、ぜひWith Youということで力説していただきたいと思えます。以上です。

○川井 ありがとうございます。結城先生、いまのご意見について、いかがですか。

○結城 頑張りたいと思えますが。明後日、なぜか知りませんが2回目ですが、宮城県で村井という知事がいるんですけれども、NHKでまた生番組で現場とやります。お暇な方はご覧になってください。NHKから「ばか野郎だけは言わないでくれ」と(笑)。それだけは釘を刺されて、ばか野郎以外は何を言ってもいいと言う。前回は苦しかったですけれども。

要するに典型的な産業論しか見えません。ですから、ひと言、もし言えたとするならば、海辺をたとえば半島だったり、リアス式海岸のところだったり、それを産業論だけ

でとらえないで、ここは俺の人生を生きるいい場所なんだ。厳しいけれども、ここを俺は生きてきた。そして、これからも生きていく。そういう人たちがたくさんいるところです。そういう人たちは、今度の津波でもものすごく傷つきましたけれども、もう2度といやだと言いながら、少しずつ、少しずつもう1度、ここで生きるということを取り戻して、少しずつ準備を始めています。田んぼや畑も同じではないでしょうか。

だから、そういう姿に対して、あれは俺たちにかわって食べ物をつくってくれているんだな、ということが分かる国民でありたいわけなんです。そうでないと、さきほど言ったようなさびしいなと思う人たちがいる。僕も一番言われることはそうです。特に予算が決まったときに、ああ、予算はもう決まったんだよな。何兆円かなと。よろしく、僕、忘れるよ、みたいなものです。人の「よろしく」なんです。しかし、現場に行けば、「よろしく」なんてものではないんです。だから、それをどういう回路で、そういうWith Youというのですか、食べ物というものをあいだに置いたときに、「あのおじさん、あの中から、また頑張ってくれているんだ」と受け止められる人たちが増えていかないと、この国の食料や農業や漁業というのは、外国と比べてあちらのほうが安いのではないかというような話しか出てこなくなるんです。

経済社会、産業社会、企業社会の論理の論理だけがひとり歩きするような中から、もう一つ、僕らのために頑張っている。そういう意識は少ないかもしれないけれども、僕にはそう見えるのですが、そういう人たちの立ち

上がる姿にちゃんといつまでもしっかりと向かい合って、「ありがとうございます」と中学生が頭を下げられるような、そんな国でありたい。

なぜなら、僕は地域文化論を教えていますけれども、日本にたくさんの祭りがありますが、どの祭りも全部食べ物が恵まれますようにと。あらゆる祭りは、食べ物が安定して手に入りますようにということを基本にした形が祭りなんです。単に衣装が派手だとか太鼓が大きいとか、山車が立派などというのは現象的です。「どうかよろしくお願ひしたい」「ありがとうございます」を神に向かって言う。皆で祈ったり、感謝したりすることを僕らは伝統的な祭りと呼んできたわけです。

そういう意味で、あえていうならば、そこには常に食べ物があつた。逆に言えば、食べ物にそれだけ苦勞をしたんだ、つらい思いもしたんだ。そういうようなところから出てきたものに近づくためにも、あえて今日はJAなのに、農業ではなく、農水省ではなく、食料省であり、農業や漁業ではなくて、我々のなくてはならない食べ物の話を皆でしようではないか。With Youというか、その人たちという意味も、そんなふうには僕は感じたわけ

です。ちょっと？多弁しました。

○川井 ありがとうございます。いいお話を伺うことができました。

皆さま、このたびは長時間にわたり、討論にお付き合いいただきまして誠にありがとうございました。本パネルディスカッションは、「地域社会」という、今日的なテーマであり、また、とても漠然とした、定義のはっきりしないテーマを取り上げさせていただきました。ですからイメージを標準化して、あるいは同質化して、簡単でわかりやすい結論を導き出すのはなかなか困難ですが、お二人の先生方から示唆に富んだ多くのお話をいただくことで、より広い世界へと思考を巡らせることができました。ただ本来ならば最後に、色平先生からTPPと医療に関する問題などについても、ひと言、お聞きしたかったのですが、時間の関係で難しくなってしまいました。この点につきましては、進行役の不手際ということで、何卒お許しいただきたいと思ひます。

○色平 ちょっとだけ話させてください。



○川井 では色平先生、お願いいたします。

8 食料省という発想は、医療ではケア省

○色平 さきほど結城さんがおっしゃったのは、現代の口分田構想という感じですね。昔、それぞれの人々に耕す畑を渡した時代があったということを思い起こすと思います。食料省という発想は我々的にはケア省です。ケアが皆さんにとって切実で、特に女衆にとって切実であるにもかかわらず、縦割りでなかなかうまくいっていない。

おばあさんの知恵というのは、おばあさんに語りかけてもらえるような家族像が変わってしまったということを感じると思っています。講演資料のところに、私が日経メディカルの2月25日付で書いた「副総理来訪」(P.21参考資料2)というのがありますが、^{ちょう}長純一ドクターという私の同僚が東北最大の仮設住宅を持つ宮城県の石巻に、ここには、休職と書いてありますけれども、佐久病院を退職して行くという覚悟がございます。我々は医者をたくさんプールしていますけれども、各地で何かあれば医者を出すような気持ちさえある。金持ちより心持ちという感覚が徹底しているということでしょうね。

それから、現実の佐久病院はどんどん医療需要が増大しているんです。増大しているがゆえに、医師の数が追いつかないということで募集中です。あの田舎で信州最大で、ドクター数は200人というような病院があること自体が、それであったら何とかなるだろうと安易にお考えになるかもしれませんが、医療需要が、周りの公的病院が倒れたり、つらくなっていることで、患者が我々のところへ押

し寄せている。病院の経営は、黒字であるがゆえに苦しんでいるという、とんでもない状況にあることを付け加えさせていただきました。ありがとうございます。

○結城 では、僕もひと言だけ。

○川井 はい、では結城先生、お願いいたします。

9 母ちゃんJAをつくろう

○結城 JAと呼ばれることも滅多にないので、企業社会と地域社会というようなことを舌足らずで申し上げました。企業社会は単純に言えば、男社会的に言われることもありました。地域社会は女性たちであります。農業も半分以上が女性なのに、JAは父ちゃんのJAなんです。これを母ちゃんのJAをつくれなにかということで、2年間福島の中央会とやってきて、行けそうになったのですが、担当者の方が亡くなって頓挫しています。

生活の問題、医療、介護、子育て、様々なことを皆、抱えている。それを解決するために、儲かったらやるよというのではない。必要という地域社会の必要を解決するために、月々1万円ずつ貯金しようと、200人のJAの母ちゃんにやったら、いいねと。12万だねと。12万が1,000人集まると1億2,000万だねと。1万人に増えると12億だねと。それを基金にして三つの事業をやりたいと。介護事業、子育ての、あるいは直売所かレストランをやりたいねと。

いわばもう一つ、JAに地域社会を考えていくときに、農業現場もそうでありませ

ども、母ちゃんの存在の大きさ、そして悩みの大きさ、そして解決したい、男は金しか生み出せないというような中ではなく、現実に対応できる母ちゃんの農協を設立していく。そして、それは食をキーワードにして、消費者もまた参加していけるような、そういう方向をぜひ模索していただけないかということをちょっと最後に蛇足ですが、付け加えさせていただきます。ありがとうございます。

○川井 大変ありがとうございました。最後にお二人の先生方からいただいたお話しが、本日のパネルディスカッションの締めこみになりました。このようなご発言を受け止めて、私たち協同組合はこれからどこに向かって進んでいけばいいのか、あるいは、

いかなる価値に重きを置いて、なにを追求していくべきなのかを、真剣に考えていかなければならないように思えます。皆さまにとって、今年度のJA共済総研セミナーが、それを考えるきっかけになっていただければ、大変うれしく思います。

結城先生、色平先生、今日は本当にありがとうございました。お二人の先生方に、もう一度、盛大なる拍手をお願いいたします。(拍手)

そして、ご来場いただいた皆様には、最後までパネルディスカッションにご参加いただき、また進行にご協力をいただきまして、誠にありがとうございました。これにてパネルディスカッションを終了させていただきます。(拍手) 以上

■パネリストプロフィール

結城 登美雄 (ゆうき とみお)

民俗研究家

1945年中国東北部(旧満州)生まれ。山形大学人文学部卒業。宮城教育大学・東北大学大学院非常勤講師。仙台市で広告会社経営に携わった後、東北各地をフィールドワーク。「地元学」の提唱や「食の文化祭」などの活動で、1998年「NHK東北ふるさと賞」、2005年「芸術選奨・文部科学大臣賞(芸術振興部門)」受賞。宮城県仙台市在住。

<主な著書>

『東日本大震災復興に果たすJAの役割』(共著、家の光協会、2012年)

『地元学からの出発—この土地をきたたけよと声に耳を傾ける』(社)農山漁村文化協会、2009年)

『東北を歩く—小さな村の希望を旅する』(新宿書房、2008年)

『山に暮らす海に生きる—東北むら紀行』(無明舎出版、1998年)等

色平 哲郎 (いろひら てつろう)

JA長野厚生連佐久総合病院 地域医療部地域ケア科医長(内科医)

1960年神奈川県横浜市生まれ。東京大学中退、京都大学医学部卒業。JA長野厚生連佐久総合病院、京都大学付属病院、長野県南佐久郡南牧村野辺山へき地診療所長、南相木村国保直営診療所長を経て、2008年よりJA長野厚生連佐久総合病院、現在に至る。外国人HIV感染者・発症者への「医職住」の生活支援、帰国支援を行うNPO「アイザック」の事務局長としても活動を続ける。長野県佐久市在住。

<主な著書>

『風のひとつと土のひとつ—医者立場からの伝言』(新日本出版社、2012年)

『命に値段がつく日—所得格差医療』(共著、中公新書ラクレ、2005年)

『大往生の条件』(角川oneテーマ21、2003年)等

色平医師をモデルとした本に、『風と土のカルテ—色平哲郎の軌跡』(山岡淳一郎著、まどか出版、2002年)がある。